

<p>研究代表者</p>	<p>所属学系・職名 法律・政治学系・准教授 氏名 阪本 尚文</p>
<p>研究課題</p>	<p>20世紀日本の知識人と「文系の知」——丸山眞男の学問論及び大学論の実証的研究 Study on the academic theory of Maruyama Masao</p>
<p>成果の概要</p>	<p>本研究では、20世紀の日本を代表する国際的知識人であった政治思想史家、丸山眞男（1914-96年）の死後に公刊された新たな一次文献や遺された図書・草稿を所蔵する東京女子大学丸山眞男文庫を活用して、丸山の知識人論・学問論・大学論の全体像を解明することを試みた。</p> <p>まず知識人論に関して言えば、先行研究では、教育社会学者の竹内洋に典型的に見られるように、丸山の知識人論は旧制高校的な教養主義と連続的に把握されていた。竹内によれば、「旧制高校的教養主義の範型的人物」である丸山の知識人観を規定したのは、戦前の東大法学部の助手時代に体験した右翼による狂信的な思想攻撃だった、ということになる（『丸山眞男の時代——大学・知識人・ジャーナリズム』、中央公論新社、2005年）。しかし、例えば、次のような丸山の発言に着目すれば、竹内の所説は維持できないだろう——「果してゲーテがどこまでその後こういう人々の身についた栄養分になっているでしょうか。青年時代の古典の読書が、たんなる『なつメロ』でなしに、その人にとって生きる知恵として蓄積されているのでしょうか。むろんこれは実務家だけのことでなく、研究者や『評論家』にとっても当てはまる問いですが、古典への親しみなるものが、多くは『俺も昔は読んだものだ』という一過性現象であるところに、旧制高校的『教養主義』のひ弱さがあるように思えるのです。」（『丸山眞男集』第13巻、岩波書店、1996年。傍点原文）丸山自身が明示的に旧制高校的「教養主義」を批判している以上、彼の知識人論は、いわゆる「大正教養主義」とは峻別されるべきで、従来の見解は修正されるべきである。</p> <p>他方、学問論・大学論に関する先行研究としては、政治思想史家、荻部直の一連の論考を挙げることができる。彼は、丸山が大学における学問を「問題解決の具ではない」「『遊び』としての学問」とみなしていたことを強調し、「遊び」の精神を培う場としての一種の教養教育の場が丸山のあるべき大学像だ、と繰り返し主張してきた（「『教養』とは何か」『長野大学紀要』特別号3号、2011年；「『教養』と『遊び』——南原繁と丸山眞男の大学教育論」『政治思想学会会報』33号、2011年；「『遊び』とデモクラシー——南原繁と丸山眞男の大学教育論」『年報政治学』2016年1号、2016年）。</p> <p>たとえば、「知的会話」と題された次のようなメモを発見したことで、この指摘自体は概ね正当だということが確認できた。「<u>「実用でなく、職場の話でなく、隣近所のうわさでなく、天下国家から、文学藝術、歴史にいたる話題や議論を、あそびとして楽しむ</u>」（東京女子大学丸山眞男文庫資料整理番号87-1-4）（傍線</p>

<p>成果の概要</p>	<p>丸山)。もともと、苅部が『教養』とは何か」のなかで『遊び』としての学問」のコンセプトがオランダの歴史家ホイジンガに由来すると断定し、丸山文庫所蔵のホイジンガの『ホモ・ルーデンス』に「とても多くの書き込みがあり、熱心に読んだことがうかがえる」ことをその根拠だとしていることは明確な誤りであることが分かった。調査の結果、丸山文庫所蔵の『ホモ・ルーデンス』（東京女子大学図書館登録番号 0187675 及び 0188854）に書き込みは一切見いだせなかったからである。丸山の学問論と大学論をホイジンガと直結させる苅部の説は実証性を欠いていることが本研究により明らかになった。</p>
--------------	---